

小・中学生の学びの意識を変える 大学からの働き掛け

田園調布学園大学
神田外語グループ
長岡技術科学大学

自身の将来像を見据え、「そのために何を学ぶべきか」という大学選びの視点を養うには、初等・中等教育の段階から大学での学びや実社会に触れさせることが必要だ。自学の特色を生かして、小・中学生が将来像を描ききっかけとなる活動を行っている3つの大学・グループを取り上げる。

仮想の街で 仕事や消費を体験

田園調布学園大学
「ミニたまゆり」

就職活動を始めた学生に「社会に出て何がしたいか」と聞くと、多くの学生が「何もない」と答える。田園調布学園大学子ども未来学部の番匠一雅准教授らが「ミニたまゆり」を始めた背景には、学生の職業観に対する問題意識があったという。

「小中高では、勉強さえしておけばいいと言われ、大学3年次に突然、職業を選ばされる。日本の学生の職業観の未熟さは、本人たちのせいばかりとは言えない」と番匠准教授。より早い段階から職業教育をする必要性を感じていた頃、ドイツで20年以上の歴史を持つ7～15歳の子どものための職業・社会教育イベント「ミニ・ミュンヘン」を知った。

地域貢献や、ボランティアとし

て参加する学生の教育を目的として、自学と同様のイベントを最初に実施したのが2005年だ。

対象年齢を5～15歳とするミニたまゆりは、川崎市教育委員会との連携事業で、地域の小・中学校の校長会を通じて児童に告知できる。2012年は2月11、12の両日に開催し、約2700人の参加者があった。

さまざまな店舗や、警察、税務署などの公共機関、店舗で売の商品を作る製作所などが並ぶ仮想の街を大学に設置。参加者はその中で働き、独自の通貨で給料を得て店舗で使う。疑似社会の体験を通して、働く喜びや社会のしぐみを学べる。

参加する幼児・児童・生徒の多くは複数の「職」に就く。それらの職業のことを知り、自分の適性を認識し、お金の使い方を学ぶ。

「将来なりたい職業はケーキ屋さんや野球選手と言っていた参加者が、参加後は銀行員や税務署職員

と答える。知らない職業はめざすこともできないので、このイベントでいろいろな体験をして、世界を広げてほしい」と番匠准教授は話す。

意欲のある幼児・児童・生徒は、開催前に数回行われる「子ども会議」に出席し、運営側に回ることもできる。街のルールや新たに設定する職業などについて話し合う中で、自分の提案が実現する喜びを知ってもらおう意図がある。

「ミニ・ミュンヘン」を模したイベントは日本各地で行われているが、多くは市民グループによるもので、大学が運営している例は珍しいという。番匠准教授は「地域の幼児・児童・生徒に仕事や社会について考えるきっかけを与えることによって、地域に根ざす大学としての役割を果たしたい」と語る。

世界に目を向けさせ 語学を学ぶ意義を伝える

神田外語グループ
「教科書にのっていない世界の授業」

神田外語大学や神田外語学院を擁する神田外語グループは、外国語の専門教育機関として、公開講座で「なぜ外国語を学ぶのか」を考える機会を広く提供している。

「教科書にのっていない世界の授業」は、長く教育事業に携わってこられたことに対する社会への「恩返し」として、2007年から毎年開催。中学生、高校生を中心に、小学生から社会人まで幅広い人が対象だ。2011年は、7、8月に4都市5会場で計5日間開催し、延べ約5000人が参加した。

講師を担当するのはグループの教員やスタッフだが、語学習得のコツや学び方を教える講座だけではなく、外国の文化や宗教を学ぶ講座、国際化について考える講座、語学力を生かせる職業について知る講座など、視野を広げることを目的としている。

神田外語グループの今井実広部長は、「海外のことに興味を持ってもらうきっかけにしたい。世界の広さを感じ、知らないことの多さに気づいてほしい。語学はあくまで、何かを探究するための手段」と話す。

受講した中学生、高校生からは「国際的な視野を持つ必要性を感じた」「自分が今、何を勉強すべきか

わかった」「進路の視野が広がった」などの声が聞かれ、結果的に外国語教育のすそ野を広げていると言えそうだ。

高等教育機関がこうした活動を行う意義について、今井広報部長は言う。「小・中学生、高校生には、もっと世界に目を向けてほしい。私たちだけでできることは限られているが、『どこかがやってくれる』と思っただけでは何も変わらない」。今後も学生募集における直接的な効果は問わず、社会貢献活動としてイベントを継続させる予定だという。

小学生出演の番組で 大学での学びを伝える

長岡技術科学大学
「テクノ探検隊」

地元の小学生が長岡技術科学大学の研究室を訪れ、実験を通して大学の研究や科学技術を紹介するテレビ番組「テクノ探検隊」。新潟県長岡市のケーブルテレビ局エヌ・シー・ティと大学が協力して制作をし、1日2回放映、大学のウェブサイトでも公開している。小学生の目線で最先端の研究を紹介し、多くの人に「大学では何が行われているのか」と関心を寄せてもらうのがねらいだ。

番組の総合プロデューサーを務める斎藤秀俊副学長は、大学祭や理科教室などで、小・中学生や保

護者に大学の紹介ビデオを見せる時の反応の鈍さが以前から気かりだったという。「小・中学生はもちろん大人も、『大学の研究内容は難しい』という先入観があるから、何をしているのか知りたいと思わない。番組では学外の第三者、しかも小学生を案内役に据えて最初の敷居を可能な限り低くし、視聴者が大学での学びや科学の世界に親しんでもらえるようにした」。

出演者は、長岡市と三条市の全小学校から募っている。応募を促進するため、各校に番組のダイジェストDVDも配付した。全世代向けの番組ではあるが、出演者が小学生ということもあり、小・中学生の反響が大きく、理科の教材にしている小学校もあるという。同大学の学生には長岡工業高専の卒業生が多く、番組をきっかけに同校進学をめざす小・中学生もいるという。

「身の回りのことと関連が深く、社会的に重要な研究をしているにもかかわらず、一般の人が大学の研究内容を知る機会はずっと少ない。特に、これから大学進学を考える小・中学生、高校生が、大学での学びに興味を持ってくれば」と斎藤副学長は話す。

2010年に始まり、1か月に1本のペースで制作してきた番組は、4月で3年目を迎えた。回数を重ねてきたことによって、番組や大学の認知度は上がっていると大学は評価している。